

人権主日  
説教

# 主が求められること

<ミカ書6:8>

孫 信一 牧師 (西宮教会)



創世記のヨセフの物語によれば、エジプトに売られて行った後、ヨセフは侍従長ポティハルの家に仕えて重んじられるようになります。しかし、ポティハルの妻の謀略によって牢に入れられてしまうのですが、その時、彼女が語ったことが記されています。「見てごらん。ヘブライ人などを私たちの所に連れて来たから、私たちはいたづらをされる。」(創39:14) この言葉に、人々の異邦人・外国人に対する偏見が、如実に表れていることを見ることができます。大国のエジプト人にとって、奴隷として売られて来るようなヘブライ人に、今でいう「人権」があるなどとは、望むべくもなかったことでしょう。同じことは古代エジプトで終わるのではなく、現代の私たちの間にも綿々と続いているのです。「あんな奴らが来たから、私たちに危害が及ぼされるのだ。」国境を越えてやって来る人たちを見る目は、ヨセフの昔とそれほど変わっていないでしょう。むしろ、時によっては、増幅されて暴発しているのが現実です。

ヨーロッパのほぼ真ん中にあるチェコの地は、今は西スラブ系のチェコ人の国となっていますが、歴史上、さまざまな民族が過ぎ去っています。中世からは、神聖ローマ帝国内の有力な王国として、ドイツ人たちと共存しており、都市にはユダヤ人街も形成されていました。近代に入り、ハプスブルク家のオーストリアに組み入れられてからは、チェコ民族としてのアイデンティティを失いかけたこともあります。第一次大戦後にチェコ・スロバキアとしてスラブ民族国家を立ち上げますが、一時ナチス・ドイツに支配され、第二次大戦後に再び独立し、社会主義の時代を経て、民主化後はスロバキアと平和的に分かれています。その間、ナチスによってユダヤ人は収容所に送られ、戦後には、ほとんどのドイツ人が追放されています。彼らは異邦人として、「あんな奴がいるから、私たちに危害が及ぼされる」という多数者の偏見によって、国から追い出されたと言えるでしょう。残された異邦人は、ローマの人たちですが、彼らへの視線が全般的に冷たいものであることは、チェコの人たちにも否定できないと思われます。私自身、アジア人としてチェコで暮らす間、よそ者への冷たい視線を感じたことが少なくありません。チェコには、近年、ヴェトナムからの移民が増え、大きなコミュニティを形成していますが、彼らが異邦人と見なされなくなる日は、いつ来るとも定かではありません。

私たちは在日大韓基督教会が定める人権主日は、日本における外国人、異邦人の人権問題に端を発しています。朝鮮半島から渡って来た人たちが、不当に差別を受けることへの抗議を表することは、主なる神様の御心にかなったことであることに間違いありません。ただ、「人権」という概念が、一般の信徒になじみが薄いものであることは否めないでしょう。聖書に近代的な意味での「人権」は謳われていません。近代の人権意識は、フランス革命やアメリカ合衆国憲法にその源があります。だからと言って、聖書の教えが人権の尊重と関わりがないわけではありません。律法では、寄留者や弱者に対する配慮が命じられています。何よりも、隣人に対する愛の教えは、すべての人の人権の尊重に繋がる教えだと言えるでしょう。

日本では、日本国憲法のもとに基本的人権が保証されています。ただし、憲法が定める基本的人権の尊重は、日本国民に限られたものであり、外国人の人権が制限されるのはやむを得ないこととされています。国家や国民という枠の中で生きる限り、異邦人が差別されるのは当然のことでしょう。自国民と外国人、身内とよそ者という区別がある限り、偏見や差別が消え去ることはないのです。その区別、隔ての中垣を崩すのが、主イエス・キリストの十字架への信仰であると、私たちは信じています。「そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。」(ガラテヤ3:28) 主の教会においてこそ、すべての人が分け隔てなく尊重されるビジョンが示されるべきでしょう。チェコの教会とドイツの教会は、民族間の葛藤の歴史を乗り越えて和解の言葉を分かち合いました。韓国と日本の教会の間でも、主にあって一つであることを証ししていく努力がなされています。教団という次元だけでなく、信徒一人ひとりが主の御恵みの中に生きることが、すべての人の人権が尊重される社会をもたらすことと信じつつ、聖書の御言葉の一つを分かち合いたいと思います。ミカ書6章8節「人よ、何が善であり／主が何を前にお求めておられるかは／お前に告げられている。正義を行い、慈しみを愛し／へりくだって神と共に歩むこと、これである。」神と共に歩み、神の義と愛に生きようとするときに、自ずと互いの人権、人として幸せに暮らす権利が保障される道が開けることでしょう。

## 韓日対照讃頌歌販売



韓国の新讃頌歌版です。交読文も韓日対照で掲載されています。

- B6版変型・1483ページ
- 価格: 2,500円 (消費税・送料込み)

※お求めは総会事務所へ

## 韓日対照聖書販売



各ページの左に韓国語(改革改正訳)、右に日本語(新共同訳)が掲載されています。

- A5版変型・1760ページ、革製
- 価格: 4,000円(消費税・送料込)

※お求めは総会事務所へ

中部地方会

# 韓日教会青少年交流ツアー 韓信教会青少年を迎えて歴史を共有

7月29日～8月1日、韓国の韓信教会から22名の青少年や信徒、そして教職者を迎え、総勢44名が参加者した中、「ともに生きる未来を見つめ、～あなたと共に～」というタイトルで、韓日教会青少年交流ツアーが中部地方と京都で実施された。

今年で8回目を迎えるこのプログラムは、未来を共に歩み行くことを願う思いを込めて実施された。今回のツアーは日本基督教団と日本キリスト教会の青少年と青年、そして教職者たちも参加し、交流の中、お互いを理解する時間を持った。特に今年は京都でフィールドワークを行い、日本の中で行われたキリスト教の宣教の歴史を学んだり、差別の歴史の中でも力強く生きたウトロの歴史を学ぶ時間を持つことができた。

一日目には、KCCJ名古屋教会でのレセプションと開会礼拝が行われ、二日目には、同志社大学の見学と、ウトロ地区見学というフィールドワークが行われた。そして三日目には、午前中に京都市内、午後にはヴォーリス記念館を訪問して日本の宣教の歴史を学ぶ時間を持った。そして、夜には教団名古屋中央教会で、韓日合同で水曜礼拝などが行われた。主の御恵みと導きによって、韓日の間でこれから歩み行くべき未来を見つめる時間を頂き、深い交わりを持つことができた。

(報告：金成彦牧師)



全国女性会

# 能登半島震災食料支援 最多震災国の「支援のあり方」模索

震災から半年が過ぎた7月中旬頃、石橋総務が「能登半島震災支援活動」の話を持ち掛け2週間足らずで石橋真理恵総務・梁律子西部女性会会長・宋南鉉牧師・任恵暎師母（大阪第一教会）・姜志鮮宣教社会局長の視察チームを作り石川県珠洲市に行くことになった。現地での活動予定と災害ボランティア車両の高速道路無料措置の期間を利用するため、急いで支援食料80袋（米2キロ・レトルト食品など）を用意し、2泊3日（85～7）の旅程で敢行した。

8月6日（火）に約2時間かけて支援食料を配布したが、仮設住宅に住んでいる方々が内々の噂で1時間も早く来て、私たちと話しながら開始時間を待った。話し合った女性の方は、「地震で家が全壊になり、入れないから夫と共に仮設にはいったんや。前は車もあって乗り回ったけど、金沢に住む娘が危ないから乗るなって。もう年だし、ここでやわやわ生きていこうと思ってる。」と自分を慰めるかのような言い方だったが、その目には涙が浮かんでいた。一瞬で全てを奪われた虚脱感、日常に戻れない無力感から溢れ出した魂の痛みを見たかのようにだった。

出会わせて下さった主に感謝しつつ、地震による震災がどの国より頻繁に起きる日本の地に住んでいるクリスチャンである私たちだからこそできる「支援のやり方」を今後も模索していきたいと思う。そして、今回の食糧支援のために総会の社会委員会よりご支援を賜り心より感謝する。(報告：姜志鮮 宣教社会局長)



特別寄稿

# カナダ青年夏期修養会参加して

銭志浩 (名古屋教会)



私は今回大変有難いことに、カナダのトロントで行われた5日間の事前プログラムと5日間の全国イベントにカナダ長老教会（PCC）から招待を受け、在日大韓基督教会のメンバーとして参加をする機会を得た。参加メンバーは日本から私を含めて2人、台湾からも2人、そして韓国とカナダからは4人の計12人であった。

事前プログラムではまず世界各国から参加をし、様々な出自を持つ彼らと様々なアクティビティを通して交流をすることで仲を深めることができ、お互いを尊重しあい、良い関係を築くことができた。そして2人ずつのペアが各礼拝のリーダーを任せられており、今まで自分が経験したことのない礼拝形態なども経験することができた。そして多くの時間は我々の事前プログラムの主な目的でもあった、のちに行われる全国イベント「大胆な希望」において我々が行うことになっていたワークショップの準備に充てられた。

この全国イベントでは各自が登録をしたワークショップに参加をし、イメージ的には大きな文化祭のようなものであった。そしてワークショップの内容は必ずしも聖書に基づいた宗教的なものばかりではなく、気候変動やLGBTQのこと、そして日本ではあまりなじみはないもののカナダや台湾では頻繁に議論されている先住民の権利についてのものなど多岐にわたっていた。我々が任されていたワークショップは1時間半であり、現在自分たちの教会や世界で問題とされているものについての発表をするというものであった。私はその中でも若者や青少年の教会での減少についてフォーカスをし、日本の2人と韓国の4人の6人でこの発表を行うことになった。

我々のこのワークショップに参加をする予定であった人が30人ほどいたため、皆が大変緊張していたのだが事前プログラムの中で深いディスカッションや議論をし、そして何度も練習をすることで良いワークショップにすることができたと思う。参加していた現地のカナダの人々も現在我々が抱えている教会としての問題に対して真摯に向き合ってくれ、質疑応答の際には多くの人々から積極的な質問があり、カナダの現状を聞くことができたこともとても印象に残っている。

他のワークショップや全体での礼拝などを通して今までの自分の経験にはなかったスタイルのものをたくさん知ることができた。はじめは戸惑うこともあったのだが、日本であろうがカナダであろうが、同じ信仰が根底にあるためすんなりと受け入れることができた。そして反対にこれらの経験を通して今までの自分の信仰というものを多角的にみる良い機会になった。

最後にこれら的大変すばらしく実りの多かった機会を与えてくださっためぐみに深く感謝すると同時に、事前プログラムを1年以上計画して下さったカナダ合同教会のSarrahとBethそしてカナダでの生活をサポートしてくれたカナダ長老教会のLily Koに感謝を伝えたい。



# カナダ長老教会の在日宣教100周年を覚えて(1) 宣教師グレン・デイビス牧師インタビュー

2023年10月、第57回定期総会において2027年にカナダ長老教会の在日宣教100周年を迎え、記念事業準備委員会が設置されました。委員会としてはカナダ宣教師たちの活動をまとめた資料集を作る準備をしています。この度久しぶりに日本を訪れた高齢の元宣教師のグレン・デイビス牧師の聞き取りを行いました。(2024年8月10日KCC)  
その内容を9月号、10月号の2回に分けて掲載します。



## 1. 記憶をたどるために

### ①どこで生まれて育ちましたか。家族・兄弟は何人でしょうか？

カナダの一番東にあるノバスコシア州 (Nova Scotia) で生まれ、17歳までそこで育ちました。家族は父と母、兄が3人と妹が1人の5人兄妹です。妹は今もカナダにいます。

### ②幼い頃の特別な思い出はありますか？

5歳の時のことです。家から100メートルほど行ったところにミラ川があり、そこでよく石投げをして遊んでいました。その日も手に石をたくさん持ち、栈橋の端にある釣り小屋のところまで行きました。栈橋と釣り小屋の間には隙間があるのですが、石投げをして遊んでいる時にそこから落ちてしまいました。近くに住んでいた人が窓から私が落ちたのを見て、急いで助けてくださいました。そのことがどうして大切な思い出なのかというと、私が16歳の時、どうして神様はあの時私を救ってくださったのかと考えるようになりました。そして同時に私は将来何をしたらよいかについても考えていました。その時に、「私は牧師になるんだ」と思ったのです。他にも牧師になろうと決意したきっかけはあるのですが、自分の命が救われた目的があるのだと思ったのです。

### ③献身しようと決められた時の家族の反応は？

父は怒りました。父は幼い頃から仕事をして家庭を手伝わなければいけなかったため、自分の子どもの中から一人でも大学に行って、医者になってほしかったのです。ですが、私が牧師になりたいと言ったので父は怒ったのです。

### ④どの神学校に入学されましたか？

モントリオールのマギル大学に所在する長老派大学 (The Presbyterian College) という神学校です。その学校寮で出会っ



総会事務局でミーティング。同席の Bruce McAndless-David 牧師は福岡生まれのグレン・デイビス宣教師のお子さん

たのが金徳成牧師任です。何年か後に黄義生牧師任にも会いました。

## 2. 海外(在日韓国人) 宣教について

### ①海外宣教師になろうと思ったのは、いつ頃でしょうか？

1957年、まだ学生だった頃、アメリカで3年に一度行われたキリスト者学生会 (InterVarsity Christian Fellowship) の宣教大会に参加しました。この宣教大会で海外宣教に対する思い、チャレンジを抱くようになりました。また、以前からお互いのことを知ってはいましたが、その大会でジョイスと知り合い、1962年に結婚しました。そのような場所でも出会ったこともあり、私たち夫婦は、海外で宣教したいと考え、宣教部に手紙を送りました。

英語圏の国に宣教師として派遣されるであろうと思っていましたが、宣教部からの返答は日本にある在日大韓基督教会でした。その時私たちは正直がっかりしてしまいました。ですが、その日の晩、頭に繰り返し浮かんでくる言葉がありました。「私 (キリスト) は、あなたのために十字架にかかったけれど、あなたは私のために日本に行かないのか」。その朝、ジョイスにこのことを伝えると「行きましょう」と言ってくれました。

### ②韓国語・日本語はどこで、どれくらいの時間をかけて学びましたか？

当時、宣教師たちがよく通っていた東京渋谷にある東京日本語学校に1年半ほど通い日本語を学びました。その後ソウルに行き、9ヶ月ほど延世大学の語学堂で韓国語を学びました。(記録/整理：鄭詩温牧師)

(この続きは10月号に掲載します。)



大阪 KCC での聞き取りを終えて



総会事務局を訪れたときの総会役員・事務局スタッフと昼食会

# 関東大震災ジェノサイド101年の追悼に託す祈り

金 性 濟 牧師(曾經総会長、元NCCJ総幹事)

1923年9月に起きた関東大震災朝鮮人ジェノサイド(大虐殺)の歴史研究家、山田昭次氏はこの歴史問題を国家責任と民衆責任という観点からとらえた。

1923年12月14日と15日、大日本帝国の衆議院本会議で、二人の国家議員(田淵豊、永井柳太郎)が内務省警保局長から出された流言蜚語の電文を掲げながら、大虐殺の国家責任を、当時の山本権兵衛首相に質した。山本首相が「熟考ノ上他日御答ヲ致ス」「政府ハ起リマシタ事柄ニ就テ目下取調進行中デゴザリマス、最後ニ至リマシテ其事柄ヲ当議場ニ懇ヘル時モゴザリマセウ」と答弁し、それ以来国家責任は放棄されたままこの国で100年が過ぎた。昨年ジェノサイド100年の年に、野党議員によって繰り返された国会質問に対して、政府側は「政府としては虐殺の事実を確認できない」を終始繰り返した。これが100年間の近現代にわたる日本の無責任国家の現実である。

国家責任と民衆責任の関係とは何か。日本国憲法の下に人権を尊重する法治的民主国家として隠蔽の闇に放置してはいけない深刻な問題について民衆が問いかけるので、国家が説明責任を果たすべく徹底調査をもって応答する。言い換えれば、国家が起こしたジェノサイドに対する無責任が100年続いたということは、主権と参政権のある大多数の民衆もそのことを追及することなく沈黙する共犯関係の100年の歴史を刻んでしまったともいえる。

関東大震災ジェノサイドに対する国家責任について人道の筋を通さなければ、この国の人々の精神はヘイトのスピーチと暴力をはじめどのような頹廃を招き、それでは世界市民からこの国の人々はどのように信頼が得られようかと憂慮する人々によって、今年101年目の9月にも追悼集会とシンポジウムが開催される。キリスト教会は何をしているか。

イエス・キリストの十字架と復活の福音に立つキリスト教会はあの時、どこで何をしていたか。山田教授が問いかけた民衆責任とは、キリスト者にとっては教会の宣教責任を意味する。

NCCの三つの委員会は、ジェノサイド100年の追悼集会を、カトリックの方々や諸教派の教会に呼びかけ、追悼実行委員会を昨年2月1日に立ち上げ、9月3日(日)夕刻にKCCJ東京教会で開催した。NCCが関東大震災ジェノサイドの追悼にこだわる一つの深い理由がある。NCCの戦前の前身組織とは、日本基督教聯盟であり、それはあのジェノサイドが起きて三か月後の11月に発足した。しかし、その発足総会の記録には、福音書の「白く塗った墓」(マタイ23:27)、またカヤパの官邸に引かれていくイエスを三度知らないか否認したペトロを思い起こさせるかのように、6千人以上の朝鮮人大虐殺について追悼の記録を全く残していない。関東大震災ジェノサイド追悼礼拝とは、単に虐げられた人々の歴史に心痛め、思い起こす時間に留まらない。一体、なぜ当時の日本のキリスト

教会とは、「基督教禁令の高札」が1873年に廃止されて以来、その後、国家的偶像崇拝を強いられる中、虐殺の狂気から逃げ惑う人々をかくまうこともできず、また追悼することさえ放棄しながら福音信仰の本質と倫理から外れ何を失う道を進んでしまったか。あのジェノサイドの犠牲者を追悼するとは、虐殺の犠牲者とその遺族の立場に視点を置いて近現代日本のキリスト教の歴史の意味を、十字架の主の前に立ち帰り、深くもう一度問い直す時間であることが、昨年の追悼文で表明されている。

KCCJは現在までに日本の二つの教団と和解の宣教協約を、1984年、そして1997年に交わしている。その協約に基づく宣教協議において関東大震災ジェノサイドとはどう議論され、向き合われ、合同の追悼の営みがこれまでなされてきたか。私は自分自身の反省を込めて、振り返る。

私は、KCCJでの牧会時代に、在日の歴史と現実について話した後に、しばしば「自分は在日ではないですから」と、韓国出身者の方から応答された記憶がある。KCCJと日本の教会との交流の場で、説教をくださる日本の牧師のメッセージの冒頭でかつての歴史に対する謝罪の一言が添えられることが多い。想像してみてもほしい。その謝罪の言葉を受ける側のKCCJの教役者・信徒の方が、その謝罪の一言にはどれほど深く、長い在日の歴史への思いが込められているかわかっておらず、関心も向けていないとしたら、それは何と奇妙な姿であり、すれ違った関係といえるだろうか。KCCJの歴史認識と理解とは、KCCJの神学的な存在理由のかかった、失われてはならない「塩の味」として厳粛に受け留められなければならない。

教会とは、自分の霊的安逸を満たすことに終始する「私の教会」ではなく、十字架と復活のイエス・キリストご自身の体なる教会である。KCCJとは、その主があつた関東大震災ジェノサイドの現場をご自分のゴルゴタの丘とされ、涙し、呻かれながら在日の苦難の歴史を共にされ、そしてその復活の主が、戦前1940年に在日朝鮮基督教が閉鎖させられ、地上からなきものとされたところから戦後のKCCJの復興を導いてくださった教会なのである。イエス・キリストの教会は自分が選んだ神ではなく、このキリストによって自分は日本出身であれ韓国出身であれ寄留者の道の中で見出され、選び取られ、導き入れられ、KCCJにおいて神の寄留者として遣わされる、という信仰告白の上に立つ。

この国と社会に二度とあのような暴虐が起こることがないように、歓待と友愛の防波堤を築いていく宣教責任を、地の塩となり、世の光としてKCCJが大切に担い続けていくことが心から願われる。



## 東京教会牧師請聘案内

在日大韓基督教会東京教会から担任牧師を請聘します。

- ・資格：在日大韓基督教会所属牧師
- ・書類提出(1次)：履歴書一部
- ・締め切り：2024年9月30日
- ・提出処：kccj.tokyochurch@gmail.com
- ・問い合わせ：090-4098-1365 (堂会書記)

## 讃頌歌委員会より「子どもさんびか」が 発行されています。

主の祈り・使徒信条・交読文・十戒  
集録(いずれも韓国語・日本語)  
一冊1,000円  
お問い合わせは総会事務局へ  
電話 03-3202-5398

